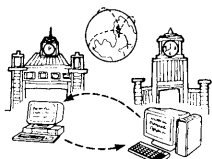


## 巻頭言



## 20 — 80 考

箱崎 勝也<sup>†</sup>



「20-80 則」という経験則がある。これは、データベースのデータの中で、「よく使われる 20% のデータへの参照が全参照の 80% を占める」という経験に基づくものである。80/20 則と言うこともあるが、日本では語呂の良さもあって「ニッパチ」のほうが幅を利かせているようだ。数値が 20-80 であるかどうかはともかくとして、多くの事象がこのタイプのルールに適合する。たとえば、CISC 型のコンピュータの命令使用頻度は 10% の命令が全使用頻度の 90% を占める。プログラムの生産性は上位 20% の人の生産性が全体の 50% になることが多いという。

同様のことは、日常の社会・経済生活においてもよく経験するところである。セールスマンを売上成績の良い順に並べると、おおむね上位 20% のセールスマンの売上が全売上の 80% になるという。また、有能といわれる人の行動をよくみると、重要な 20% の仕事に 80% の時間を割いていると報告されている。知的生産性を向上させる基本はこのようなタイムマネジメントにあるらしい。こういう話を聞くと、どうしてもよいような 20% の仕事に 80% の時間を使ってしまう自分をふと反省させられてしまう。

ところで、情報処理学会の活動についてもこの「20-80 則」が当てはまるのではないかと思う。現在会員数は 3 万人を超えたレベルにあるが、年 2 回開催されている全国大会の参加者は毎回 2000 人前後である。これに、学会誌、論文誌への投稿、研究会活動、規格関係の活動などを加えると約 6000 人の会員が何等かの意味で積極的な学会活動をしていると考えることができる。つまり、会員の約 20% の活動が、学会の全活動の 80% 程度を占めているようだ。

このような積極的に学会活動に参加している会員は、その活動を通じて学会に貢献しているとともに、会員としての利益を享受しているといえよ

う。問題は残りの 80% の会員に対して、学会は何をもって報いているかである。

学会の会員サービスの主なものは、学会誌、論文誌、研究会報告、全国大会予稿集、 세미나などを通じて会員への最新技術情報の提供であろう。なかでも、全会員へ配布される学会誌の役割は重要である。学会誌が十分に会員の求める情報を提供しているかどうかを、学会誌の編集を担当するものとして真剣に考えてみる必要がある。

これまでの編集関係者のご努力により、学会誌の内容が充実し、読み易いものになってきているとのご意見をいただいている。毎号のトップを飾る情報処理最前線だけは読むという声もしばしば耳にする。編集に苦勞している側からみれば有り難い言葉であるし、苦勞のしがいがあるといえる。しかしながら、一方では、興味ある記事があまりない、あるいは、もっと実務に直接的に役立つ記事が欲しいという声も多い。特に、企業の実務に携わっている人からそのような不満の声が聞こえてくる。正確な調査データがあるわけではないが、会員の約 80% 近くはシステム、ソフトウェアの開発に携わっている実務寄りの会員であると思われる。その 80% の人の求めるものに答えることは大切なことである。

編集委員会では、学会誌に実務に役立つ記事を増やす方策を検討し、ある程度実行している。もちろん、そうはいつでも、学会誌としての品位を保ち、商業誌とは一線を画すことも必要である。高度に技術的な記事で実務に役立つものも多いはずである。節操なく実務だけを重視する姿勢では学会誌としての存在意義をなくしてしまう。それらを考慮した上で、80% の会員の声に誠実に耳を傾け学会誌の改善に努力すべきである。学会誌における「20-80 則」は、20% の記事が 80% の会員の満足をもたらすといったあたりが適切なバランスなのであろうか。 (平成 5 年 11 月 2 日)

<sup>†</sup> 本会理事 NEC